新潮文庫

平将門

上卷

海音寺潮五郎著

新潮社

平将門
上巻

定価210円

新潮文庫

昭和四十二年五月三十日　発行
昭和四十二年十月十五日　二刷

著者　海音寺潮五郎

発行者　東京都新宿区矢来町七一　佐藤亮一

発行所　東京都新宿区矢来町七一　株式会社新潮社
電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店でお取替えいたします。

㊐ 印刷・二光印刷株式会社　製本・植木製本所
© C. Kaionji 1967　Printed in Japan

新潮文庫

平将門

上巻

海音寺潮五郎著

新潮社版

1756

平

将

門

上卷

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目次

早い春・おそい春……九
男の山・女の山……二七
矢風……四二
父と子……五六
北上メノコ……七八
土地……一〇二
筑波の楓……一二三
官位……一三七
宮仕え……一五八
暗の人々……一九四
几帳の陰……二二四

女王……二三二
招かぬ客……二四五
梟首……二六五
東風のたより……二九二
破陣楽……三一五
盗賊王……三二七
ほととぎす……三五三
更生……三八六
百日紅……四〇四
氏族放逐……四三九
驕妻……四六四
桔梗の宿……四七九
父と娘……四九五

春の突風……五一八
青柳……五四六
阿修羅の群……五六五
死の旋風……五八三

早い春・おそい春

筑波の山から西一里の石田の里。

常陸の前大掾平ノ国香の館を中心として、その家の子、郎党、農奴などによって形成されている部落である。

暑いさかりの午下り。

部落では、どの家も午睡でもしているのだろう、生きて動いているものは、なに一つとして見えなかった。人はもとよりのこと、犬も、鶏も、雀も、燕も。

丁度この時、石田の里をつつむ松林のつづく小高い台地の端に、二人の人物があらわれた。

男と女。二人ともまだ若い。共に十五六。二人とも美しいが、身分は、服装から見てわかる、大へん違うようだ。少年の方は、色どり美しい狩衣に、銀造りの太刀を佩き、扇子など持って、清らかで涼しげないでたちだが、少女はあらい麻の野良着を、わずかに肌をつつむばかりに着ている。

松林を出ると、少年は、小川のへりにしゃがんで、ザブザブと手を洗い、嗅ぎなおしては、また念入りに洗う。

少女は、ぼんやりそれを見ていた。暑い日に照りつけられながら立っている顔が、放心したようであった。

少年はいたずらッぽく笑って、その顔を見上げた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「そなたも洗ったらどうだ。くさいぞ」
少女の汗ばんだ顔に、羞恥の色があらわれた。うつ向いて、黙って、小川に近づいた。手を洗い、ついでに顔も洗った。
その間に、少年は、松の木蔭に腰を下ろし、扇づかいしながら、眉にせまって大きく、目のさめるように濃い緑の色に塗りつぶされている筑波の山の方を見ていた。その顔には、いく度か微笑に似たものがかすめ、あこがれに似た物思いの影が浮かんだ。
少女は、髪を撫でつけながら、近づいて来たが、一間ほどのところで立ちどまった。近づくことを遠慮している風であった。
「ここへ来い。ここへ坐れ」
少年は、パタリと扇子を閉じて自分の脇を示した。
少女の顔は、うれしげにかがやいた。おとなしく、しかし、おどおどと、示された場所に腰を下ろした。
少年のちょいとしたしぐさにも、少女の表情が敏感に変化するのは、いじらしいくらいであった。しかし、少年にはそんなことは一向感ぜられないらしく、支配しなれた者の無頓着さで、少女にむかって言う。
「そなた、今夜、お山に行くか」
少女は、一旦相手を見てうつ向きながら、
「若君は？」
「おれは行く」

「わたくし、行ってはいけないのでしょうか」
「そうだ。行ってはいけない」
少女は相手を見た。やや長い間、見ていた。しかし、少年が見返すと、うつ向いた。消え入るように低い声で言った。
「若君がお出でになりますのに」
「そうよ、おれは用事があるから行くが、そなたには用事があろうはずはない。そなたは行ってはならんのだ」
ふと、少女は歌い出した。美しい声ではあったが、低い、ふるえる、かなしい声であった。

卑田（ひきた）には道一筋
高原（たかはら）は八（や）ちまた
八ちまたに花は咲けども
卑田には人も通はず
一日（ひとひ）二日（ふたひ）三日（みか）の春雨

少女の顔には、おさえきれない嫉妬（しっと）の色があった、少年は、その横顔を見つめつつ、唄を聞いていたが、だんだん意地悪い顔になった。微笑しながら言った。
「それはあてつけか」
少女はあわてた。自らの大胆さにおどろきもしたようであった。
「いいえ、いいえ、いいえ――でも……」
「でも……？」

少女は涙ぐんだ。答えなかった。少年は意地悪い調子で追求した。
「でもなんだというのだ？」
「……かなしゅうございます」
「うらめしくはないのか。腹も立ったのだろう」
「いいえ、いいえ、そんな恐れ多い……」
「それを知っていれば、言うことはないはずだ」
少女はうつむいた。声を立てずに泣いていた。少年は、少し気の毒になったらしい。顔をやわらげた。
「おれは男だから、一人の女だけで満足しているわけには行かない。しかし、そなたの方からそむかないかぎり、捨てはせぬ。きげんをなおせ。いとしい子よ」
と、言いながら、やさしく背を撫でてやった。いかにも可愛ゆくてならないもののように、少女の頬をつまんだ。涙にぬれてはいるが、まるくなめらかで、生き生きとつややかな血色の頬。
少女のきげんは忽ちなおった。媚びをたたえた目で、少年を見た。
「いけない若君。姫遊びばかりしてと、評判が悪うございますよ。けれども、わたしを忘れないでね。忘れないでね」
「ハッハハハハ、忘れはせんといっている」
「きっとでございますよ」
「うん、うん、忘れるものか。可愛いやつめ」
少年は、少女の頬にまた手をふれた。立ち上った。

「それでは、また逢おう」
「こんどいつ？」
少女はあわてて、言いすがったが、少年はもう歩き出していた。
「使いをやる」
もうふりかえりもしない。口笛を吹きながら、油のにじむように暑苦しく蟬の鳴きしきっている松林の中につづく径を、歩み去った。
十分位の後、少年は、松林を行きつくして、館の上に出た。
館はこの山つづきに、広大な地域をしめて建っている。前面に深い濠と高い土居をめぐらし、部落を眼の下に見下ろす位置であった。十数棟ある建物は、すべて草葺きであったが、大きく、高く、厚く葺いてあるので、重厚で、壮大な建築美を構成していた。
依然として口笛を吹きながら、少年は、裏庭に通ずる急な小径をトントンと下りて来た。すると、そこの厩の前に立って、奴僕をさしずして馬の足を洗わしていた男があった。足音にふりかえって、
「やあ、これは太郎君」
と、片膝ついた。
二十二三の、屈竟な体格の若者であった。ちぢれて房々とした濃いヒゲや、左右連なった濃い眉と深い眼窩をもった鋭い目に、なんとなく日本人ばなれのしたものが感じられた。これは佗田ノ真樹といって、この館の数ある郎党中、武勇第一の名ある人物であった。
あいさつされて、少年は、軽くうなずいただけで行きすぎようとしたが、ふとふりかえった。

「小次郎はいるか」
「おいでになります」
「どこへも出ずか」
「はい。ずっとおいでであります」
「なにをしている」
「さあ、なにをしておいでであります。大へんおとなしいお方で……」
「おれとは、まるでちがうと言いたいようだな」
と、少年は微笑した。真樹も微笑した。
「よくおわかりで」
「おのれらの胸の中くらいわからんでどうする。しかし、おれは小次郎のような朴念仁(ぼくねんじん)ではない。いくら暑いからとて、この若さで、日がな一日、家へすッこんでなんぞおられるものか」
「お違いになってお悪いとは思っておりません」
「あたりまえよ。朴念仁がよくて、おれが悪くてたまるか」
「といって、姫遊びばかりなさるのがよいとも考えてはいません」
「こいつ！」
真樹は、ひげの中の赤い口をあいて、カラカラと笑った。くったくのない、明るい笑いであった。少年も、笑い出した。
やがて、少年は、母屋(おもや)のわきに小さくつき出した小座敷の庭にあらわれた。
そこには、一人の少年が、へやの真中に円座(えんざ)をしいて、キチンと坐って、庭の空を見ていた。

浅黒い血色のよい顔に、眉のひきしまった、凛々(りり)しい感じの顔立ちであったが、目つきに沈鬱なものがあった。なにか一心に思いつめているのか、放心しているのか、少年の来たのも気づかないようであった。

「小次郎」

と、こちらの少年は呼びかけた。

座敷の少年は、ゆっくりとこちらを見た。

「おお、太郎ぬしか」

おちついてはいたが、楽しい空想を破られた人の調子があった。

「よせよ、太郎ぬしなどという年寄りくさい呼び方は」

庭の少年は、こう言いながら、簀子(すのこ)（縁側）に上ってそこに坐った。小次郎と呼ばれた少年は立上って、自分の円座をもって来て、裏返してすすめた。

「かまうな。おぬしは当家の客人(まろうど)だ。そんなことをしてもらうと、こまる」

しかし、そう言いながらも、太郎は円座に坐って、ハタハタと扇子づかいをしていたが、しばらくすると、小次郎を見た。

「退屈そうだな」

微笑しながらであった。からかうような表情があった。それに気づいたかどうか、小次郎は沈鬱な調子でこたえた。

「退屈している」

「酒を飲もうか」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com